

氏名	岡京子
報告番号	甲第11号
学位の種類	博士(社会学)
学位記番号	甲第1号
学位授与年月日	2011(平成23)年3月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題名	認知症ケア施設における介護労働 —ユニットケア化による“ながら遂行型労働”と感情労働の深まり—
論文審査委員	主査 春日キスヨ 教授 副査 小林甫 教授 副査 牧園清子 教授 副査 天田城介 (立命館大学大学院先端総合学術研究科准教授)

論文内容の要旨

(1) 論文内容の要旨

本論文の主題は、公的介護保険の開始に伴い制度的に新たに導入されたユニットケアという高齢者施設のケアのあり方が、どのような特質を持つ労働であるかを明らかにし、それはどのような理論的枠組みで説明できるかを考察するものである。

日本における認知症ケア理論のパラダイム転換が生じたのは1990年代後半であり、認知症ケアと介護労働についての社会学的研究の蓄積は少なく、ましてユニットケアについての社会学的研究はさらに少ない。そうしたなかで、本論文は従来型集団ケア実施施設とユニットケア実施高齢者施設を対象としたフィールドワークを通して、ケアワーカーの労働内容、労働過程、労働編成に関する事実を詳細に明らかにする。そのうえで、ユニットケア高齢者施設におけるケア労働の特質が従来型集団ケア実施施設における労働と異なり、「介護労働」「疑似家事的労働」「気づかい労働」といった肉体労働、頭脳労働を重層的、同時並行的に行う「ながら遂行型労働」といった性格を持ち、労働編成のあり方もそうした労働を可能にする「ながら遂行型労働編成」という形で成り立っている事実を指摘する。さらに、そうした事実を踏まえ、ユニットケア施設におけるケア労働について、新たな理論的枠組みでの理解が示される。

(2)論文構成

序章 研究の目的と意義

1. ケアシステムの転換とケア労働
2. 社会学は認知症・認知症ケアをどう捉えてきたか
3. 「感情労働」という概念—自己疎外からケアリングの要素へ
 - 3-1. ホックシールドの見出した感情労働
 - 3-2. ホックシールド以降—特に看護領域における「感情労働」研究
 - 3-3. ケアと感情
4. フィールドでの発見
 - 4-1. フィールドワークの概要
 - 4-2. 「ながら遂行型労働」と感情労働の深まり
5. 本研究の意義—「ながら遂行型労働論」の提起
6. 本論文の構成

第一章 認知症ケアの現在

1. 認知症ケアのパラダイム転換
2. 認知症ケアの変容過程
 - 2-1. ケアの不在—收容対象としての認知症者(1970年代まで)
 - 2-2. 「呆け老人をかかえる家族の会」の誕生—介護者本位のケア(1980年代)
 - 2-3. 民間の先駆的実践—呆けても心は生きている・個の発見(1990年代)
 - 2-4. 尊厳を支える全人的ケア—ユニットケアの誕生と制度化(2000年代)
3. ユニットケアの現在
4. 高齢者施設におけるケア労働
 - 4-1. 従来型集団ケアにおけるケア労働/機能分化させたチームケア
 - 4-2. ユニットにおけるケア労働/文脈依存型ケア
 - 4-3. ユニットにおけるケア労働はどのように語られているか

第二章 「日常生活を共にする」ケアとは何か

- 「疑似的家事労働領域」と「ながら遂行型労働」—
1. 認知症高齢者と「日常生活を共にする」ことの意義
 2. 調査の対象と方法
 - 2-1. タイムスタディ法
 - 2-2. 生活時間調査
 - 2-3. 調査の対象

- (1)ユニットケア実施/介護老人保健施設 アオギリ園
- (2)ユニットケア実施/特別養護老人ホーム トチノキ園
- (3)従来型大規模処遇/介護老人保健施設 クスノキ園
- (4)従来型大規模処遇/特別養護老人ホーム ネムノキ園

2-4. 調査の方法

- 3. コミュニケーションにおける質と量の差
- 4. 「ながら遂行型労働」
- 5. 「疑似的家事労働領域」の誕生
- 6. ユニットにおける労働編成
 - 6-1. 労働空間
 - 6-2. 労働編成
- 7. 小括

第三章 「自尊心を支える」ケアとは何か

— 「ながら遂行型」に提供される「気づかい労働」 —

- 1. 「自尊心を支える」ことの意義
- 2. 脱アサイラム状況という視点と問題の所在
- 3. 調査の対象と方法
 - (1)ユニットケア実施/特別養護老人ホーム シラカシ園
 - (2)アオギリ園 3階東ユニット
- 4. 「VIPユニット」の生活
 - 4-1. 無視できない「告げ口」
 - 4-2. 結束による力の行使
- 5. 利用者への「気づかい労働」
 - 5-1. ひとり職場での「気づかい」
 - 5-2. 関係修復としての「気づかい」
- 6. 「気づかい労働」はどのように行われるか
 - 6-1. 労働の実態—不規則かつ長大な勤務時間
 - 6-2. 労働の実態—ひとりの労働
 - 6-3. 労働の実態—孤独な夜勤
 - 6-4. 労働の実態—仲間との連帯
 - 6-5. 労働の過酷さ
 - 6-6. 第二次的調整
- 7. 小括

終章 ユニットにおけるケア労働の特質—ながら遂行型労働論の提起

1. 利用者の重度化とケア労働
2. 家事労働的性質の付与
3. 「ながら遂行型労働」とは何か
4. 残された課題と展望
 - 4-1. 重度認知症者とのかかわり
 - 4-2. ながら遂行型労働を支えるもの

(3) 各章の内容の要約

「序章 本論文の目的と意義」

序章では、まず、介護保険の導入ならびに認知症ケア理論のパラダイム転換によってもたらされた市場化に伴う経営者側の利潤追求、効率優先の流れと「高齢者の尊厳を支える」というケア倫理を強める方向という相反する社会的要請が、ユニットケア実施施設におけるケアワーカーの労働にいかなる形で現象しているか、さらにそうした労働実態を、先行の認知症ケアについての社会学的研究、感情社会学研究を踏まえてどのような理論的枠組みによって読み解いていくことが可能なのかといった問題意識が本論文の出発点にあることが示される。

次に、結論を先取りする形で、そうした関心にとって行ったフィールドワークのデータの分析を通して明らかにしえたユニットケア施設における介護労働の特質とそれが持つ理論的意義が次のように示される。すなわち、ユニットケア施設におけるケア労働に関しては、ホックシールドの感情労働論を踏まえ、その制度化によって「感情労働のさらなる深まり」が要請されるようになったとする春日キスヨの見解と、それを否定し「責任労働の強化」とみる上野千鶴子の見解がある。

しかし、調査データの分析から、ユニットケアにおける介護労働では、ホックシールドが提唱した「表層演技」や「深層演技」といった感情労働のみでなく、看護労働の研究を通して James, Nicky や Steinberg, Ronnie が指摘した、他者の感情管理を行う労働（岡氏はそれを「気づかい労働」と名づける）が行われている。さらに、その「気づかい労働」は要介護高齢者とのコミュニケーションという形で単独の労働としてなされているのではなく、高齢者の日常生活を支えるためのそのつどの身体的ケアや「疑似的家事労働」といった肉体労働・頭脳労働と重層的かつ同時並行的になされるといった特徴を持つ。そして、こうした形の労働は、「ながら遂行型労働編成」という労働編成によってしかなしえない事実を述べる。

その意味で本論文の研究上の意義はユニットケア施設における労働がいくつかの労働から構成

される「ながら遂行型労働」であり、「ながら遂行型労働編成」という特徴をもつ点を詳細な事実によって明らかにした点、さらに、上野千鶴子のいう「責任労働」という捉え方では捉え切れないものであることを示した点にあるという見解が述べられる。

「第一章 認知症ケアの現在」

第一章ではまず、ユニットで働くケアワーカーたちが持つ理念的規範や、ケアワーカーや施設に対する社会的要請の背景としてある認知症ケアに関する理念的变化が①1970年代まで「収容対象としての認知症者」②1980年代「介護者本位のケア」③1990年代「呆けても心は生きている・個の発見」④2000年代「ユニットケアの誕生と制度化」という区分で整理される。

次に、高齢者施設ケアに関する論考や社会学的先行研究を通して、従来型集団ケア施設における介護労働が効率的な業務遂行を目的とする一定の労働内容を設定したチームケアであり、その効率性は利用者に対してケアワーカーが持つ相対的に高い権力によって維持されている。一方、ユニットケアにおけるケア労働はそのつどの個々の利用者の生活の文脈に沿って、臨機応変に労働内容を変えていかざるを得ない文脈依存型の労働であるという言及をとりあげ、従来型集団ケア施設とユニットケアにおけるケア労働の違いが整理される。これはフィールドワークで見出された事実を後に考察していく際にひとつの下地となる。

次の第二章、第三章ではフィールドワークで得られたデータをもとに分析が進められる。

「第二章 “日常生活を共にする”ケアとは何か——“擬似的家事労働領域”と“ながら遂行型労働”」

第二章ではまず、採用した調査方法論について述べ、そのうえで調査対象としたユニットケア実施施設(介護老人保健施設1園、特別養護老人ホーム1園)、従来型大規模処遇施設(介護老人保健施設1園、特別養護老人ホーム1園)の概要が述べられる。

そのうえで従来型大規模処遇施設とユニットケア実施施設におけるケアワーカーの労働内容、労働過程をタイムスタディ調査法で行い、それをNHKの生活時間調査の方法で処理し、そのデータに基づいての分析がなされる。

その結果、従来型大規模処遇施設とユニットケア実施施設とで大きくみられた差異として①「排泄介助」「食事介助」「コミュニケーション」においてユニットケア実施施設の行為率が従来型に比べて高く、「記録・調整」ならびにケアワーカー自身の「自己維持と充足」についてはユニットケア実施施設の方が従来型より低い②ユニットケア施設においては一定の時間のうちに多様な働き方がみられる③ユニットケア施設においては「食事」に関する家事が高い割合で行われているといった事実を指摘する。さらに、従来型施設とユニットケア施設における利用者とケアワーカーのコミュニケーション様式にも大きな違いがみられ、従来型では利用者に対する「選択を求める言葉かけ」や「指示・抑制する」といったその場限りの言葉かけが殆どであったのに対し、ユニットケアでは時間的経過を踏まえながら、ケアワーカーがそのつどの利用者のニーズに応える形で相互に組み

合う膨大な量の応答的コミュニケーションがなされている事実を指摘する。

次に、そのような形で見出された事実を踏まえ、ユニットケア施設における労働の特質を「ながら遂行型労働」として提示できるのではないかという岡京子の見解が示される。すなわち、従来型施設におけるケアワーカーの働き方が、その日の役割分担にしたがって効率的に同種の作業をまとめた時間続けるという形の労働であるのに対し、ユニットでは「排泄介助」「食事介助」等々の多様な労働が利用者の要求や必要に応じてランダムに行われる。さらに、従来型施設では調理や清掃等、他職種によって分担されていた労働が、ユニットケア施設では「疑似的家事労働」領域としてユニットケア特有の労働内容として担われていた。また、利用者とのコミュニケーションにおいても、従来型ケアに比べ、ユニットケアでは「疑似的家事労働」や身体介助を「ながら遂行型」に行うなかで、双方向的な膨大な量のコミュニケーションがなされていた。こうした事実から、ユニットケア労働を「ながら遂行型労働」と名づけることが出来るのではないかというのである。

さらに、従来型施設とユニットケア施設の労働編成の分析をケアワーカーがおかれた生活空間、勤務表といった労働環境の検討を通して行っている。その結果、空間配置において、従来型施設ではケアワーカー固有の空間が保障されているのに対し、ユニットケア施設ではそれが保障されていない。さらに、勤務表の組みかたもユニットケア施設ではひとり勤務、かつ「夜勤」回数も多く、「通し」という 13 時間続きの勤務もあるといった点で従来型のそれと比べてより過酷である。そのつど利用者のニーズに応え、一日の生活の流れを止めない「ながら遂行型労働」という働き方がこうした形のケアワーカー個人の私的生活を犠牲のうえに成立している事実を見出している。こうした点で、ユニットケア施設の労働編成を「ながら遂行型労働編成」と名づけてよいだろうと述べる。

「第三章 “自尊心を支える”ケアとは何か―“ながら遂行型”に提供される“気づかい労働”―」

第三章では、参与観察と要介護高齢者に対するインタビューにより得られたデータをもとに、ユニットにおけるケアワーカーと高齢者の相互作用様式が両者間のコミュニケーションを通して明らかにされる。身体的自立度が高く認知症の程度が軽いといった自己主張能力の高い利用者が生活するユニットを対象として、高齢者の自尊心を維持するための労働が高齢者とケアワーカーの相互作用、高齢者同士の関係性、ケアワーカーによる高齢者集団の関係調整といった場面でどのような形で遂行されているかについての分析が進められる。

その結果、大規模施設利用の高齢者に比べ、ユニットケア施設では、利用者がケアワーカーに対し力を発揮する場面がみられた。それは経営者に対する「告げ口」「利用者同士の結束」ケアワーカーに対する不満の表明といった形で現象していた。そうしたなかでケアワーカーは「無視」や「聞き流す」といった表層演技による自己の感情管理のみならず、利用者の自尊心維持をはかるために、「敬語」の使用、時間外の私的時間を使っての関係修復といった細心の注意をはらっての利用者の感情への働きかけを行っていた。こうした労働を本論文ではホックシールドの感情労働概念を超える部分を含んだ「気づかい労働」と名づけている。

さらに、そうした「気づかい労働」はどのように行われているか。それは大規模集団ケア施設の労働を食事、入浴、排泄といった最低限の生理的欲求を満たすためのケアをタイムスケジュールによって複数のケアワーカーが一斉に行う労働として、それと対比させる形で語りえるような労働ではなく、また、単独の労働として行われるのではなく、不規則でかつ13時間30分に及ぶ「通し」といった長大な労働時間のなかで、利用者個々人の文脈を読み解きつつ、同時に身体と生活を支える頭脳労働、身体労働を行うなかで行われる、重層的かつ多様な労働と同時並行的に遂行されている労働であるというのである。

そのうえで、そうした過酷な労働を支えているものは何かといった点が検討される。それは同じ施設でユニットケアを担う「仲間との連帯」であり、さらに過酷な労働を何とか切り抜けるためにケアワーカーがうみ出すさまざまな「第二次調整」の手法である。具体的には仕事遂行時の各ユニットを超えての同僚間の連携、束の間の時間を調整しての会食といった「仲間との連帯」、さらには男性職員の利用といった「第二次調整」の実態が示される。

「終章 ユニットにおけるケア労働の特質—ながら遂行型労働論の提起」

終章では、二章、三章で明らかになった事実、すなわち、小規模化されたユニットにおいて利用者の尊厳に配慮したケアを提供するということは、ケアワーカーにとって、身体的・頭脳的労働として直接的介護労働と「疑似的家事労働」を行いながら、複数の利用者を視野に入れたうえで同時並行的に「気づかい労働」をしつつ、さらに1日のユニットの生活を踏まえて自らの労働過程をそのつど再編していくといった「ながら遂行型労働」という働き方でしか充足できないといった事実を再度繰り返し確認した上で、そうしたケアが利用者が重度化した場合、維持され続けるのかという問いが立てられる。そして、重度化に伴い利用者が自己主張できず、家族や管理者からのケアワーカーに対する統制が適切に作用しない場合、ルーティン化した〈作法としての寄り添い〉といった状況が生じる事実が重度の利用者が多いユニットケア施設の実態から示される。

さらに、重度化に伴う高齢者の自己主張能力の低下により、ユニットにおける労働そのものが、家事労働の特性である評価されない、競争にさらされないといった傾向をより強めていく事実が指摘される。そして、そうした事実を踏まえ、ユニットケアで求められるケアワーカーが利用者と「人」として出会うケアの成立には、利用者(家族)・ケアワーカー・管理者の相互統制のありようが関わり、利用者及び利用者をめぐる人間関係に支えられて、要介護高齢者の「尊厳を支える」ための「気づかい労働」は成立しうるという見解が述べられる。

次に、従来から存在したケアのスキルとしての「ながらケア」と、今回発見した「ながら遂行型労働」の相違を明確にしたうえで、「介護労働」「疑似的家事労働」とともに細やかに慎重に提供される「気づかい労働」が「ながら遂行型労働」の構成要素であることが改めて示される。そのうえでそうした特質をもつユニットにおける労働は単なる「感情労働」によってのみでも説明できないし、上野千鶴子が言う「責任労働」といった表現が不適切であるといった理論的見解が示される。

最後に、今回は考察するに至らなかった残された課題が提示される。ひとつは、重度化の進んだユニットにおいて、どのような形でケアワーカーは利用者と出会えるのかといった問題であり、これは、今後利用者の重度化が進む中で求められる重要な視座である。また、過酷な労働編成のなかで複雑で高度な労働を成し遂げ、かつ自己維持していかなければならないケアワーカーの支援についての方策はどうあるべきかも、次の大きな課題としてあげられる。

論文審査結果の要旨

1. 審査の経緯

2010年9月10日に社会学研究科に提出された、博士学位申請論文、岡京子『認知症ケア施設における介護労働—ユニットケア化による“ながら遂行型労働”と感情労働の深まり—』を審査するために、事前に2010年5月20日に開催された第2回研究科委員会において学内審査員3名、2010年7月8日に開催された第3回研究科委員会において学外審査員1名が選任され、指導教授である春日が主査となった。

審査委員会は2010年10月7日、2010年12月2日、2011年1月20日に審査作業を行い、2011年1月27日に最終試験を行った。10月、12月には審査委員会を行った後、本人と審査委員3名が列席する形で、博士論文としての精度をさらにあげるために、より適切な事実分析、基本概念の意図的な整理、各章の小括による明晰な論理展開の重要性、さらには対象施設の特性を明確にすることの必要性などの指摘を、質疑応答のなかでしていった。

2. 審査の内容

2011年10月7日の第一回審査委員会の冒頭、提出論文の包括的な検討と評価に基づき、同論文が博士学位論文としての要件を基本的に備えているものと判断し、審査に入ることとした。

審査委員会は合計4回の審査委員会を通じて、提出論文の構成、内容、方法、新たに示された知見を詳細に審査し、以下の結論を得た。

本論文は高齢者施設ケアとしてのユニットケア実施施設においてケアワーカーの労働を詳細に検討し、ケアの小規模化はどのように要介護高齢者の尊厳を支えているのか、またケア労働はどのように変化しているのか、そしてそれはどのような枠組みで説明できるのかということについて考察することを主題とするものである。そうした問題意識に導かれて第二章ではタイムスタディ法で得た事実を生活時間調査の処理方で整理したデータを下、ユニットケア労働の特性が「擬似的家事労働」と「ながら遂行型労働」にあるという事実が指摘される。さらに、第三章では身体的自立度が高く認知症の程度が軽いといった自己主張能力の高い利用者が生活するユニットを対象として、高齢者の自尊心を維持するための労働が高齢者とケアワーカーの相互作用、高齢者同士の関係性、ケアワーカーによる高齢者集団の関係調整といった場面でどのような形で遂行されているかについての分析

を行い、「自尊心を支える」とい労働がホックシールドの感情労働概念を超える部分を含んだ「気づかい労働」という形で提示され、それが単独の労働として行われるのではなく、不規則でかつ13時間30分に及ぶ「通し」といった長大な労働時間のなかで、利用者個々人の文脈を読み解きつつ、同時に身体と生活を支える頭脳労働、身体労働を行うなかで行われる、重層のかつ多様な労働と同時並行的に遂行されている労働である事実が指摘される。

審査委員会ではこの本論文の基底となった問題意識さらにそこで見出された事実、理論的指摘に対して以下のような評価を与えた。

3. 評価できる点

①全章においてこの問題意識が貫かれ、その視点・機軸に即して研究全体が構成されている点で、その問題意識の明確性、課題設定の重要性、テーマの学術的意義とその理論的可能性の観点からして、高い評価を与えられるべき意義のある論文である。

②本研究はこれまできちんと分析・精査されることがなかったテーマを扱っており、その意味で、当該研究分野の新たな理論的・認識論的地平を切り開く研究である。

③認知症ケア施設における介護労働研究、とりわけユニットケアが実施されている施設における介護労働研究を緻密かつ詳細に分析した学術的研究は極めて少ない現状のなか、本研究はユニットケア施設におけるケア労働においていかなる現実が立ち現れているのかについて、詳細かつ緻密に分析した初めての学術的試みであり、その独創性と先駆性、論理的構成と理論的射程の広がりにおいて、博士の学位に値する研究であると評価する。

④特に評価すべきは本研究が「社会人院生」である筆者の明確な問題意識によって構想された研究であり、「社会人院生」である筆者でしか展開し得ない実証的研究であり、書き記すことができない知見を提示した論文であることも評価に値するものとみなした。

ただ、その上で、本研究には現時点においても課題が残っていないわけではない。それは次のような点である。

4. 今後の課題

①重要かつ刺激的なテーマを主題として、実践的にも理論的にも意義ある研究を今回評価に足るレベルまでなしとげているが、今後、研鑽を重ね、本論文で提示した理論を一層精緻化していくことで、この分野における研究にさらに貢献できると考える。

②理論的な問題点としては、「介護労働」や「擬似的家事労働」と「気づかい労働」はどのように結合しながら「ユニットケアにおける介護労働」の現実を作り出しているのか、「介

護労働」や「擬似的家事労働」と「感情労働」の実践は現実の労働編成のなかでどのような困難として立ち現れていくのかに対して一定の整理をしながらも、そうした諸概念をさらに上位の概念にあげ、その理論構成と布置連関をいま一步十分な形で示していない点である。そうした作業をすることによって、本論文の理論的関心である上野千鶴子の「感情労働強化批判/責任労働論」に対する反論を徹底的に行い、その理論的不備を指摘できたはずであるが、そうした点での理論的こだわりは浅いままにとどめられている。

③調査対象施設におけるマテリアルな労働条件はその経営体の組織形態・組織運営・組織編成によって構成されて、それらは介護保険制度の制度設計と運用によって規定されている。しかし、そうした点についての言及は対象施設の概要として整理されているだけで、対象とした経営体とその他の経営体との違いが明確に示されないまま分析が進められている。ここで見出した事実が他の経営体のケア労働にも共通する事実を何らかの形で触れていたら、本論文で提起されたユニットケア労働の特質が普遍的なものであることを示したであろう。

最後に、④本論文で示された「脱アサイラム」といった表現はやや不適切かと思う。「アサイラム」を管理・収容施設と捉えるのであれば、「脱-アサイラム」と表現できなくはない。しかし、ゴフマンの『アサイラム』の理論的視座からすれば、そう単純には言えない問題を含んでいる。全制的施設における剥奪過程のもとで、利用者は自らのアイデンティティを深く傷つけられる中でも、様々な「抵抗の実践」を行使することで辛うじてアイデンティティを保持しているような事態を描出したことこそ、ゴフマン理論の重要な核心である。その意味で、本研究は、いわば利用者のアイデンティティが保たれるようになる一方、逆に、それを保つための実践を強く要請されている介護労働者が過酷な労働状況に置かれ、その状況への「抵抗の実践」さえも「孤独」かつ「一人で抱え込まざるを得ない」ものになっていることを明らかにした研究であり、「脱-アサイラム」と表現してしまうことには問題が残るといえるだろう。

5. 審査の結果

改めて審査の結果を報告する。岡京子『認知症ケア施設における介護労働—ユニットケア化による“ながら遂行型労働”と感情労働の深まり—』が、いまだ研究蓄積が少ないなかで、明確な問題意識のもとでユニットケア労働について詳細な事実を明らかにしえた点を高く評価する。さらに、介護労働ならびに看護労働研究分野において、ユニットケア労働の特性が「擬似的家事労働」と「ながら遂行型労働」である点を詳細な事実にもとづいて明らかにし、さらにそこでの「気づかい労働」が利用者個々人の文脈を読み解きつつ、

同時に身体と生活を支える頭脳労働、身体労働を行うなかで行われる、重層的かつ多様な労働と同時並行的に遂行される労働であるという指摘はこれまで誰によっても指摘されてこなかった点である。この意味で、本論文が今後この問題をテーマとする研究上大きく貢献するであろう点を高く評価する。

以上、本論文の課題と結論に即して審査した結果、審査委員全員の合意によって、本論文が博士課程を修了し、博士の学位を授与するにふさわしいものであると結論し、最終試験における「合格」を確認した。

I 略歴

1. 1957（昭和32）年2月2日 岡山県生まれ

2. 学歴

昭和52年 3月 岡山県立倉敷中央高等学校衛生看護科専攻科卒業

平成4年 3月 佛教大学通信教育学部 社会学部社会福祉学科卒業

平成12年 4月 川崎医療福祉大学 大学院 医療福祉学研究科 修士課程 医療福祉学専攻 入学

平成14年 3月 川崎医療福祉大学 大学院 医療福祉学研究科 修士課程 医療福祉学専攻 修了（医療福祉学修士）

平成18年 4月 松山大学 大学院 社会学研究科 博士後期課程 入学

3. 職歴

昭和52年 4月 岡山大学医学部付属病院 看護部 看護師（平成5年3月まで）

平成5年 4月 かとう内科診療所 副婦長（平成7年2月まで）

平成7年 3月 岡山西大寺病院 病棟婦長（平成9年3月まで）

平成9年 4月 順正短期大学 保健科 保健福祉専攻 専任講師（平成15年3月まで）

平成14年 4月 九州保健福祉大学 通信教育部社会福祉学部 臨床福祉学科 専任講師（平成15年3月まで）

平成15年 4月 川崎医療短期大学 介護福祉科 専任講師（現在に至る）

II 研究業績

1. 学術論文

- ① 「介護福祉士養成学生の死生観について－施設実習前と実習後を比較して－」
平成10年2月 順正短期大学研究紀要 第26号 99-105〔共著者〕齋藤美智子、岡京子、小河育恵
- ② 「死の教育について－介護福祉士養成教育の現状と課題－」平成11年2月 順正短期大学研究紀要 第27号 41-47〔共著者〕齋藤美智子、岡京子、小河育恵
- ③ 「岡山県下訪問看護ステーションにおける在宅介護支援センターとの連携について」平成12年2月 順正短期大学研究紀要 第28号 123-135〔共著者〕岡京子、小坂田稔、齋藤美智子
- ④ 「介護福祉士職半年目で体験した介護ニアミス（ひやり・はっと体験）－卒業生

- から考える介護自己防止教育のあり方」平成13年2月 順正短期大学研究紀要 第29号 107-114 [共著者] 齋藤美智子、岡京子
- ⑤ 「中途障害者とその介護者参加による小地域ネットワークづくり」平成13年8月 川崎医療福祉学会誌 11 (1) 171-174 [共著者] 岡京子、宮原伸二
- ⑥ 「介護療養型病棟における身体拘束廃止の取り組み」平成14年2月 順正短期大学研究紀要 第30号 97-105 [共著者] 岡京子、田村蔦枝、荒木順子吉森敏子、黒川兼子、森脇克恵、須山壽美子
- ⑦ 「通所系サービスにおける介護者への情緒的サポートの重要性ー在宅痴呆高齢者の介護者の調査ー」平成14年3月 川崎医療福祉大学大学院修士課程論文
- ⑧ 「地域で暮らしている痴呆性高齢者の生活の満足度」平成14年3月 米子医学雑誌 53 (2) 79-89 [共著者] 人見裕江、岩崎尚子、中村陽子、小河孝典、畝博、郷木義子、岡京子、徳山ちえみ、谷垣静子、宮林郁子、浦上克哉、稲光哲明、矢倉紀子
- ⑨ 「在宅痴呆性高齢者の介護負担感と介護保険サービス利用に関する研究」平成14年3月 米子医学雑誌 53 (2) 90-98 [共著者] 人見裕江、中村陽子、小河孝典、畝博、森千佳、浜田美穂、岩崎尚子郷木義子、岡京子、徳山ちえみ、谷垣静子、宮林郁子、浦上克哉、稲光哲明、矢倉紀子
- ⑩ 「介護福祉士養成学生から考える介護事故防止教育の取り組みー介護実習で体験した介護ニアミス（ひやり・はっと体験）からー」平成15年2月 順正短期大学研究紀要 第31号 105-114 [共著者] 齋藤美智子、岡京子
- ⑪ 「在宅痴呆高齢者の介護者におけるソーシャル・サポートに関するー考察ー情緒的サポート源としての友人に注目してー」平成15年12月 川崎医療短期大学紀要 第23号 59-65 [共著者] 岡京子、宮路敬子
- ⑫ 「介護職の『Burnout』と『仕事に対する意識』との関係について」平成17年2月 順正短期大学研究紀要 第33号 49-56 [共著者] 齋藤美智子、岡京子
- ⑬ 「通所介護における音楽療法の意義」平成17年3月 関西国際大学研究紀要 第6号 99-110 [共著者] 中村陽子、人見裕江、濱谷紀子、中平みわ、徳山ちえみ、岡京子、齋藤美智子、小野敬史、小野知衣子、津田理恵子、畝博
- ⑭ 「通所系サービスにおける介護者への情緒的サポート」平成17年6月 介護福祉研究 13 (1) 87-90 [共著者] 岡京子、田口豊郁、小河孝則
- ⑮ 「認知症ケアに関する施設管理職の意識」平成17年7月 厚生指標 52 (7) 39-46 [共著者] 人見裕江、寺田准子、中村陽子、畝博、小河孝則、齋藤美智子、郷木義子、岡京子、森山美恵子、廣野祥子

- ⑩ 「介護福祉理念に関する一考察—国際生活機能分類に基づいて—」 平成 17 年 12 月 川崎医療短期大学紀要 第 25 号 35-39 [共著者] 高木健志、土田耕司、岡京子
- ⑪ 「介護技術教育における技術習得にむけた授業の取り組みについて—教員複数制と学生少人数制を導入した授業が学生の技術習得に及ぼした効果と課題—」 平成 17 年 12 月 川崎医療短期大学紀要 第 25 号 41-46 [共著者] 田中久美子、塚原貴子、平山孝子、宮路敬子、村田美智子、三宅真奈美、赤松明美、中島保恵、土居エミ、岡京子、内田富美江
- ⑫ 「認知症ケアの変化と介護福祉士養成教育—教科書の記述における感情規則に焦点をあてて—」 平成 18 年 12 月 川崎医療短期大学紀要 第 26 号 75-80
- ⑬ 「介護現場実習学生における『自己の揺らぎ』体験—利用者との関係葛藤場面の記述から—」 平成 20 年 11 月 介護福祉研究第 16 巻 1 号 71-74
- ⑭ 「医療・福祉系短期大学における入学前教育の現状と課題」 平成 21 年 3 月 リメディアル教育研究 4 (1) 12-18 [共著者] 下田健治、新見明子、小郷正則、村中明、片岡則之、岡京子、中原朋生、橋本美香
- ⑮ 「高齢者施設の脱アサイラム化とケアワーカーの感情労働の深まり—『VIPユニット』とよばれる現場から—」 平成 21 年 5 月 フォーラム現代社会学 第 8 号 92-104
- ⑯ 「ユニットケアにおける労働の特質—家事労働領域の誕生と「ながら遂行型」労働—」 平成 23 年 日本保健医療社会学会誌投稿中

2. 口頭発表

- ① 「在宅での看取りを断念せざるを得なかった一例からその要因を考える」
平成 6 年 11 月 第 18 回日本死の臨床研究会（新潟・長岡）抄録集 208~209 [共同者]
岡京子、加藤恒夫、橋本真紀
- ② 「『公的介護保険』教育方法の一試み」 平成 11 年 2 月 第 5 回日本介護福祉教育学会（和歌山・白浜）抄録集 [共同者] 岡京子、富山由紀子、齋藤美智子
- ③ 「通所介護における音楽療法の意義—音楽療法と免疫機能との関係—」 平成 14 年 8 月 9 日 第 28 回日本看護研究学会学術集会（横浜） 第 28 回日本看護研究学会学術集会—プログラムおよび発表要旨—25 (3) 271 [共同者] 人見裕江、谷垣静子、宮林郁子、中村陽子、岡京子、齋藤美智子、郷木義子、田中久美子、三村洋美
- ④ 「地域中高年の健康づくりに関する研究」 平成 15 年 3 月 16 日 第 16 回日本看護研究学会近畿・北陸／中国・四国地方会学術集会（兵庫・神戸） 第 16 回学術集

会抄録集 59 [共同者] 人見裕江、中村陽子、小河孝則、岡京子、齋藤美智子、田中久美子、寺田准子、郷木義子

- ⑤ 「痴呆症ケアにおけるアセスメントに関する研究（第1報）－看護職および介護職別に見た特徴－」平成15年7月24日 第29回日本看護研究学会学術集会（大阪）プログラムおよび発表要旨 26 (3) 207 [共同者] 人見裕江、中村陽子、岡京子、齋藤美智子、郷木義子、田中久美子
- ⑥ 「痴呆症ケアにおけるアセスメントに関する研究（第2報）－施設別に見た特徴－」平成15年7月24日 第29回日本看護研究学会学術集会（大阪）同上 208 [共同者] 中村陽子、人見裕江、岡京子、齋藤美智子、郷木義子、田中久美子
- ⑦ 「介護福祉士養成教育における介護過程展開の教授法に関する研究（第一報）－介護福祉実習での自己評価を参考に－」平成15年9月21日 第11回日本介護福祉学会大会（石川・金城大学）第11回日本介護福祉学会大会プログラム・発表要旨集 110-111 [共同者] 田中久美子、藤原芳朗、内田富美恵、岡京子、土田耕司、宮路敬子、村田美智子、野瀬真奈美
- ⑧ 「介護保険施設における管理者の痴呆症ケアに関する意識」平成15年10月12日 第51回日本社会福祉学会（大阪・羽曳野・四天王寺国際仏教大学）日本社会福祉学会第51回全国大会報告要旨集 374 [共同者] 中村陽子、人見裕江、小河孝則、徳山ちえみ、岡京子
- ⑨ 「痴呆ケアにおけるおしゃれの意味」平成16年7月30日 第30回日本看護研究学会学術集会（埼玉・さいたま子・大宮ソニックシティ）第30回日本看護研究学会学術集会－プログラムおよび内容要旨－27 (3) 212 [共同者] 人見裕江、中村陽子、郷木義子、齋藤美智子、岡京子、田中久美子
- ⑩ 「介護実習で体験した介護ニアミス（ひやり・はっと体験）の現状と課題－学習進度・実習段階による比較－」平成16年9月5日 第12回日本介護福祉学会大会（岩手・岩手県立大学）第12回日本介護福祉学会大会プログラム・発表要旨集 156-157 [共同者] 岡京子、齋藤美智子、郷木義子
- ⑪ 「終末期のあり方に関する－考察－壮年期を対象とした意識調査－」平成16年9月5日 第12回日本介護福祉学会大会（岩手・岩手県立大学）同上 208-209 [共同者] 郷木義子、齋藤美智子、岡京子
- ⑫ 「認知症状を呈する高齢者施設入居者のアセスメントの視点－入居者の攻撃性がスタッフにとって最も困る症状かどうかとの関連から－」平成17年7月2日 第18回日本看護福祉学会全国大会（大阪・関西福祉科学大学）日本看護福祉学会誌 11 (1) 38-39 [共同者] 寺田准子、人見裕江、中村陽子、津田恵理子、岡京子

- ⑬ 「介護福祉士養成学生から考える介護事故防止教育の取り組み—初回実習前後の危険（リスク）予測を比較調査して」平成19年1月25日 第13回日本介護福祉教育学会佐賀大会（佐賀・サンメッセ鳥栖）第13回日本介護福祉教育学会佐賀大会発表抄録集 63 [共同者] 齋藤美智子、郷木義子、岡京子 117
- ⑭ 「介護現場実習学生における『自己の揺らぎ』体験—利用者との関係形成不全場面の記述から—」平成19年5月20日 第33回日本保健医療社会学会大会（新潟・新潟医療福祉大学）保健医療社会学論集第18巻特別号 64
- ⑮ 「介護家族の会の発達過程を支援する意義と課題平成19年9月23日日本社会福祉学会第55回全国大会（大阪・大阪市立大学杉本キャンパス）報告要旨集 460-461 [共同者]人見裕江、徳山ちえみ
- ⑯ 「高齢者施設の脱アサイラム化とケア労働—『VIPユニット』とよばれる現場から—」平成20年5月25日 第59回関西社会学会大会（松山・松山大学）報告要旨集 62
- ⑰ 「介護福祉士養成学生の感染予防意識と手洗いの実態調査（第1報）」平成20年11月2日第16回日本介護福祉学会大会（仙台・仙台白百合女子大学）プログラム・報告要旨集 117 [共同者] 齋藤美智子、岡京子
- ⑱ 「ユニットケアにおける労働の特質—家事労働領域の誕生と『ながら遂行型』労働—」平成21年5月17日第35回日本保健医療社会学会大会（熊本大学）保健医療社会学論集 第20巻特別号 82
- ⑲ 「新カリキュラムにおける介護実習展開—多種別実習の取組み—」平成21年9月3日 第16回日本介護福祉教育学会（金沢）プログラム・発表要旨集 38 [共同者]三宅美智子、岡京子、土田耕司、辻真美、小倉和也、橋本祥恵、藤原芳朗
- ⑳ 「施設実習時の介護学生の手荒れと課題平成21年9月13日第17回日本介護福祉学会大会（東京・文京大学）発表報告要旨集 133 [共同者] 齋藤美智子、村上留美、岡京子、小倉和也
- ㉑ 「10週にわたる在宅介護実習の取組み—新カリキュラムにおける介護実習展開（第2報）」平成22年8月23日 第17回日本介護福祉教育学会（東京・目白大学）発表要旨集 122-123 [共同者] 辻真美、岡京子、三宅美智子、河邊聡子、三宅真奈美、小倉和也、藤原芳朗

3. その他

平成20年5月 関西社会学会大会奨励賞受賞

Ⅲ 所属学会

日本保健医療社会学会 関西社会学会 日本介護福祉学会
日本介護福祉教育学会 日本認知症ケア学会 日本在宅ケア学会
日本看護研究学会 日本社会福祉学会 日本看護福祉学会 川崎医療福祉学会

以上